第５章　書きの学習の実際

一般に文字学習においては、読みと書きは互いに補い合うものであり、書くことによって記憶の正確さが増し、自己表現の手段も広がる。そのため、書きの導入を急ぐ考え方もあるが、レディネスの形成の状態は児童一人一人で異なる。レディネスの形成が十分でないと考えられるときは、手の運動の統制学習や形の概念の形成など、点字の特性を踏まえた基本的な学習から始めることが大切である。（第３章参照）

本章では、点字の書きの学習の導入段階における一般的な学習プログラムを取り上げる。その内容は次のとおりである。

(1) 点字タイプライターによる書きの学習
(2) 点字盤・携帯用点字器による書きの学習
(3) 字音と点字を結び付けて、語を書き表す学習
(4) 分かち書きと切れ続きの学習
(5) 表記符号の学習

点字盤を用いて書きの学習を行う場合は、書いたものを裏返して読むために、読みと書きでは、点の位置が左右逆になる。また、点字盤の小さいマスに一点一点順を追って書いていくためには、手指の機能や巧ち性の発達が必要である。そのため、点字盤による書きの学習は、入門期の初期の学習段階の児童には負担が大きい。

一方、凸面書きの点字タイプライターは、書いた点字を裏返さずにそのまま読むことができ、適当な力でキーを押せば一様な点字を書くことができる。したがって、入門期の点字学習の初期においては、児童の負担をできるだけ少なくすることを優先する観点から、凸面書きの点字タイプライターによる学習が効果的であると考えられる。

しかし、必ずしも点字タイプライターの使用にのみ固執する必要はなく、児童の実態、学習能率、指導方法、用具の特徴などをよく検討したうえで、最も適したものを選ぶことが大切である。いずれにしても、点字盤は携帯に便利であること、故障が少ないこと、書いているときの音が静かであることなどの優れた点があり、その有用性は、学習が進むにつれて高くなるので、適切な時期に点字盤による書きの指導を行う必要がある。

また、初期の段階において文字としての学習が完成しても、すぐに文を書くことが可能になるわけではない。墨字の場合でも同じことがいえるが、特に点字の場合は、文節分かち書きを習得しなければならないので、文、文節、単語の理解を深める様々な工夫が必要である。国語の教科指導等と連携することが望ましい。

なお、ここで取り上げる内容は、小学部段階で指導すべきものであるが、中途視覚障害者や重複障害の児童生徒の場合も、語いや題材を工夫しながら基本的には同じ内容を用いることができる。

第１節　点字タイプライターによる書きの学習

１　点字タイプライターの使い方の学習

点字タイプライターには様々な種類のものがあるが、初期の指導では、読むときと同じ配列で打つことができ、書いた字をすぐに確認することができるものがよい。

ここでは、一般的に用いられることの多いパーキンスブレイラーを取り上げて説明することにする。（日本点字図書館の資料より）

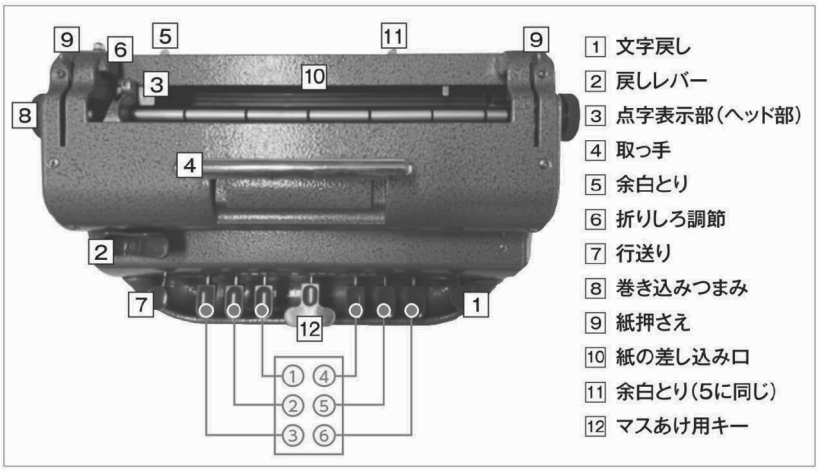

図 5-1　点字タイプライター

【題材５－１】

(1)「点字タイプライターの動くところを確かめてみよう」

〈ねらい〉

点字タイプライターの操作を覚え、一人で動かすことができる。

〈内容〉

ア　両足裏を床につけ、両肩は水平に保ち、姿勢を正す。体は机にまっすぐに向け、机の高さは、腕をやや下げて、点字タイプライターのキーの上に指が置けるように、低く調整する。

イ　マスあけをするためのキー（以下、「マスあけ用キー」という。）を押して指を戻すと、点字を打ち出す部分（以下、「ヘッド部」という。）が一マス右へ移動することを知る。また、どの程度の力を入れたらよいかを理解する。

ウ　手首を下げないようにして、マスあけ用キーを連続して押していく。ヘッド部が動かなくなったら元に戻し、再びマスあけ用キーを押していく。

エ　ベルが鳴った後、何回押すとヘッド部が移動しなくなるかを数える。

オ　そのほかに動くところがないかを探す。

【留意事項】

ア　教師がキーを操作する音を聞くことにより、指の力の強さを知らせる。

イ　マスあけ用キーは原則として利き手親指を使うが、始めはどの指で操作してもよい。キーを押して指を離すと、ヘッド部が一マス動くことを理解する。

ウ　正面中央がマスあけ用のキーで、その左は内側から順に、①の点、②の点、③の点、右は、内側から順に、④の点、⑤の点、⑥の点の各キーである。左端の丸いキーは行送り、右端の丸いキーは、一マス戻しである。それぞれのキーにシールなどを貼って手掛かりとするなどの工夫をするとよい。

エ　ベルは、７マス打ったら行末となるようにセットし、行移しの手掛かりとなるようにする。

オ　パーキンスタイプライターには木製の点消し棒が付属されているが、児童が使用するには難しく、使い方の指導は小学部の段階ではしなくてもよい。

カ　タイプライターは、直射日光の当たらない、落下の危険のない場所に保管し、ほこりよけカバーをかぶせておく。ほこりが点字用紙の差込口などからタイプライターの内部に入ってしまうと、機械部品の故障につながりやすいからである。

図 5-2

【ほこりよけのカバーをかけた例】

写真は、パーキンス付属品の専用カバーと、手作りの布製のカバー。

児童が学習で日常的に使用する場合には、児童の机の脚元横に専用の箱（底を補強した段ボール箱など）を設けて、その中にカバー（専用カバー・布カバーや適当な大きさの布）をかけて保管するとよい。タイプライターの置き場所については、学級の児童全員に周知し、みだりに場所を変更することがないようにする。

(2)「点字用紙をセットしてみよう」

〈ねらい〉

点字用紙を正しく差し込み、書き始めの状態にすることができる。

〈内容〉

ア　左右の巻き込みつまみを向こう側の方向へ止まるまで回し、紙押さえを手前に引く。

イ　差し込み口の台に紙を乗せ、紙の左側を折りしろ調節部分に触れるまで左に寄せてから、まっすぐ奥に差し込む。

ウ　紙押さえを向こう側に倒し、巻き込みつまみを手前に回して紙を巻き込む。紙の最後（上端）を差し込み口の端にそろえ、まっすぐ差し

込まれているか確かめる。

エ　さらに巻き込みつまみが動かなくなるまで巻き込んだところで、行送りをするためのキーを一回押す。

【留意事項】

ア　点字用紙を正しくセットすることが、点字タイプライターを使用する際の基本であることを理解する。教師は、点字用紙が正しくセットされているかを必ず確認する。

イ　最初のうちは点字用紙を差し込む方向がわかりにくく、上から突き刺すように入れようとする場合も多い。点字タイプライターの向こう側に同じ高さの台（例えばBOXティッシュの箱など）を置くと、点字用紙を水平に滑らせるように入れられる。この台は、書いた点字を読んで確認する際にも、紙が安定するので便利である。

ウ　紙を外す場合は、紙押さえを手前に引いてから抜き取る。

２　点字タイプライターによる書き方の基本練習

点字タイプライターは、点字用紙に点を浮き出させて書くため、力が弱いと薄い点にしかならない。リズミカルにどの指も平均した力でキーを押せるようにする必要がある。そこで、ここでは、特にキーを押す指の形、手首の角度、姿勢、押す強さなど、点字を書く練習に移行できるための基本を指導するようにする。

【題材５－２】

(1)「キーを押すときの指の動きを、机の上でやってみよう」

〈ねらい〉

①、②、③、④、⑤、⑥の点のキーを押す指を机の上で動かし、キーを押す指をスムーズに動かすことができる。

〈内容〉

ア　①の点、②の点、③の点は、それぞれ左手の人差し指、中指、薬指、④の点、⑤の点、⑥の点は、右手の人差し指、中指、薬指でキーを押す。点字タイプライターのキーを押すときのように、机の上で指を動かし、六つの点を押す動きを練習する。

イ　スムーズに指が動くようになるまで、次のような点のキーを押す練習する。

(ｱ) ①②③④⑤⑥の点（⠿）
(ｲ) ①③の点（⠅）
(ｳ) ①③④⑥の点（⠷）
(ｴ) ②の点（⠂）
(ｵ) ②④⑤⑥の点（⠶）
(ｶ) ②⑤の点（⠒）
(ｷ) ①②③⑤の点（⠗）
(ｸ) ①③⑤の点（⠕）
(ｹ) ②④⑥の点（⠖）

【留意事項】

ア　キーの配列に合わせて指を広げ、それぞれの指を自由に上下できるように指の分化を図る。点字導入の学習を始める小学部低学年の児童は、指（特に薬指）の力が弱く、指を広げるのも難しいことが多いため、すぐに実際のキーを押す練習を行うと書くことに抵抗感をもつ場合がある。そこで第１段階として指の分化を図り、点字を構成する点をそれぞれの指の動きとして運動感覚でとらえることができるようにする。

イ　教師が順不同に点の番号を伝え、それを指で示すゲームをしたり、そのスピードを徐々に上げたりしていくなど、練習に対して興味を引き出す工夫も必要である。

(2)「キーを押してみよう」

〈ねらい〉

点字タイプライターのキーを押す指と、それによって書ける点との対応を、実際に書いた点に触れることによって確認する。また、「メ（⠿）」の６点を均等な点で書くことができる。

〈内容〉

ア　①の点、②の点、③の点、④の点、⑤の点、⑥の点のキーにそれぞれの指を置き、同時に押す。

イ　ヘッド部が動かなくなったら、行替えをして押す。

ウ　前の行にきれいに点が出ているか確認する。

エ　(1)の(ｱ)～(ｹ)の点を出す練習を行う。

【留意事項】

ア　キー配列と指との対応の練習なので、文字としての点字を教えることは避け、点字をタイプライターで書く場合の基本動作の練習にとどめる。

イ　それぞれのキーを押す際には、指をキーの上に乗せたままにせず、押したキーからいったん指を離して、あらためて次のキーを押すようにする練習をできるだけリズミカルにできるとよい。

ウ　書いた点字は、必ず児童自身が指で確認するようにする。その際、前述したように、タイプライターの向こう側に同じ高さの台を置くと、紙をタイプにセットしたままでも確認しやすくなる。

エ　書くことができたという達成感をもてるように支援するとよい。「①③④⑥の点がレールみたいだね」などの見立て遊びにつなげてもよい。

オ　(ｲ)の①③の点（⠱）、(ｴ)の②の点（⠂）のみ、(ｶ) の②⑤の点（⠒）は、基準がないので、この点のみでどの点か判断することはできないので注意する。

カ　(ｸ)の①③⑤の点（⠵）と、(ｹ)の②④⑥の点（⠊）を続けるなど様々な模様を書き出したりして、楽しみながら点に触れて、練習に対して興味を引き出す工夫をするとよい。

キ　初学の児童の場合は、触れて確認しやすいよう、１行空けで打つとよい。触読に慣れてきたら、通常の行にする。

ク　タイプライターの持ち運びについては、落下による破損や怪我に十分注意し、直射日光の当たらない場所にほこりよけのカバーなどをかけて保管する。

ケ　タイプライターのキーを押す音が気になるようであれば、タイプライターの下に折りたたんだタオルやマット状の物を敷くと防音対策になる。

第２節　点字盤・携帯用点字器による書きの学習

１　点字盤・携帯用点字器による学習の意義

点字を常用している児童生徒の筆記用具として現在広く使用されている